

【原著論文】

ネパールにおけるスポーツの開発と国際協力： ビレンドラ国王競技会に焦点をあてて

加藤 泰紀

日本体育大学スポーツ文化学部スポーツ国際学科

Sport development and global cooperation in Nepal: Focusing on the Birendra Shield sport competition

KATO Taiki

Abstract: Nepal's framework for sport development can be broadly divided into three areas. One area is organized by the Sports Council, which aims to foster national teams and popularise sports among the public. A second area is the development of martial arts, such as judo and karate, in police academy schools. The third area is physical education in schools. The Japanese government has been actively supporting its development for nearly half a century.

The development of school physical education in Nepal came to be emphasised beginning with the 1971 "National Education System (5-year) Plan". However, there were no teachers who could teach physical education and sports.

As part of the national education plan, the Ministry of Education, Science, and Technology (MoE) decided to hold the Birendra Shield sports competition. This is a sports event consisting of junior and senior high school students, similar to the inter-school athletics competition in Japan, and athletics and volleyball were held every year. The athletic events included men and women's sprint, middle-distance, long-distance, throwing, long jump, high jump, and triple jump. It is no exaggeration to say that this competition, held at the district, province, and national levels, would have been difficult to achieve without the support of the Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) under the Japan International Cooperation Agency (JICA).

This paper focuses on the Birendra Shield sports competition, which was held in the time of King Birendra in the 1980s, from the perspective of sport development and global cooperation. The competition was led by the MoE in Nepal, with JOCV members providing material, equipment, and technical assistance, such as how to make the track and field and volleyball courts, and referee methods. This is strongly related to the dispatch of JOCV physical education team members. Each volunteer was assigned to regional education offices under the MoE in five development regions at that time, with the simultaneous dispatch of many JOCV science and mathematics teachers to a wide range of local elementary and junior high schools.

In this paper, I collected and analysed the information of the Birendra Shield sports competition during that period using the descriptive interview method. As a result, it was pointed out that, for instance, the rules of sports are the source of the argument for winning. Regarding discrimination by caste, Japanese involvement led to arbitration and the smooth progress of the competition.

It was found that through the competition and the cooperation with Japan, sport development could be effectively carried out both at the physical education and sports specialists at the government level, and also at the grassroots level, such as in schools and clubs. Therefore, it can be said that it is important to collaborate with people who have experienced sports in Japan, rather than simply developing sports through sports experts only.

With Nepal's democratisation, the Birendra Shield abolished. However, many of the students who participated in this competition later became members of the Nepal Sports Council, and are leading Nepal's sports today.

要旨：ネパールにおけるスポーツの開発の枠組みは、大きく3種類に区分できる。第1にスポーツ評議会によるもので、ナショナルチームの指導や一般への普及を目的としている。第2に警察を中心とした武道（柔道、空手）の普及、そして第3に学校での体育科教育である。そして、いずれも日本政府は、積極的に支援に介入してきた。

ネパールの学校体育の普及は、1971年に始まった「国家教育体制（5カ年）計画」の中で重視されるようになった。しかしながら、体育を教科の中に位置づけても、実際に体育・スポーツを教えることのできる教師がいないというのが実情であった。そして、その対策の一環として、ビレンドラ・シールドがあった。

ビレンドラ・シールドとは、中・高校生のスポーツの集い（日本の高校総体に相当）で、陸上競技とバレーボールが実施されていた。郡大会、地区大会、全国大会と続くこの競技会は、当時の青年海外協力隊の支援なしでは、実現が困難であったと言っても過言ではない。

本稿は、1980年代、ビレンドラ国王の名のもとに開催されていた、ビレンドラ・シールドについて、スポーツの開発と国際協力の視点から考察するものである。

この競技会は、もちろんネパールの国が主導ではあるものの、日本政府は青年海外協力隊の体育隊員による器具・用具の物質的な援助や、コートの作りかた、審判など大会運営の技術的な支援も行った。そして、体育隊員のチーム派遣、すなわち各開発地区（当時は5開発地区）教育事務所への配属や、広範囲にわたる地方の小中学校への理数科教師の大量同時派遣が大きく関係していた。

本稿では、当時の情報を記述式インタビューによって収集し分析した。その結果、例えばスポーツのルールが勝つための言い争いの材料となっていること、カーストによる差別などが指摘された。その場合、日本人という外国人が関わることで仲裁となり、円滑な競技進行へとつながった。ゆえに、スポーツの開発は、政府レベルといったトップでは体育・スポーツの専門家が、学校現場といった草の根レベルでは、日本の学校やスポーツ教室などでのスポーツ経験者が積極的に関与することで効果的に実施できることが明らかとなった。したがって、スポーツの開発は、単にスポーツの専門家のみで実施するのではなく、日本においてスポーツを経験してきた人たちのサイドワーク的な協力を得ることが重要であると言える。

ビレンドラ・シールドそのものは、ネパールの民主化により継続が困難となり消滅してしまった。しかし、当時、この競技会に出場した生徒の多くは、後にネパールスポーツ評議会の一員となり、今日のスポーツ界をリードする存在となっている。

(Received: April 13, 2021 Accepted: July 26, 2021)

Key words: Sport development, global cooperation, Nepal, Birendra Shield

キーワード：スポーツの開発、国際協力、ネパール、ビレンドラ・シールド

1. はじめに

2015年9月の国連サミットで採択された持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）では、17のゴール・169のターゲットといったグローバル指標が示されている。ここではスポーツそのものに焦点を当てられている項目は見受けられない（Department of Economic and Social Affairs Sustainable Development, online）。しかし日本においても、スポーツ庁が『スポーツSDGs宣言』を明言し、「スポーツの力を活用したSDGs達成への貢献」を掲げるなど政府レベルにおいても積極的な取り組みがなされている（スポーツ庁, online）。また近年では研究分野においても、「スポーツの開発」をテーマに事例報告などが蓄積されつつある（岡田千あき編著, 2020; 齊藤一彦, 岡田千あき, 鈴木直文編著, 2015）。

日本スポーツ振興センター（JSC: JAPAN SPORT COUNCIL）は、『日本におけるスポーツとSDGs, 開発と平和のためのスポーツ（SDP）への取り組み状況』

の中で、「スポーツとSDGsというテーマは近年ハイレベルでは活発に議論されるようになってきているものの、スポーツとSDGsに関するマネジメント手法は未開拓な分野であり、世界的に見てもそれぞれの政策策定者や現場のプロジェクトマネージャーの間に理解や運用の面で大きな相違があるのが現状である。」と指摘している（JAPAN SPORT COUNCIL（日本スポーツ振興センター）, online）。

この半世紀でICT技術も飛躍的に進み、インターネットが世界を繋ぐようになったことで、世界情勢は多岐にわたる分野で急激な変化を見せている。スポーツのグローバル化も、その影響を受け着実に進化を遂げている。しかし先のJSCの指摘にもあるように、政策策定者と現場の間には大きなギャップがあるという現状は否めない。その一因として、現場の草の根レベルでの研究が極めて少なく、スポーツの開発における課題の本質的な部分にまで言及できていないことが考えられる。このような背景から、本稿ではレトロスペクティブ調査（後ろ向き研究）を応用して、

ネパールにおけるスポーツの開発の事例を分析することにより、今日にも繋がるスポーツの開発の本質的な課題について考察する。

ネパールにおけるスポーツの開発の枠組みは、主に3つに区分でき、今日においてもその基盤は大きくは変わらない。一つはスポーツ評議会によるもので、ナショナルチームの指導や一般への普及を目的としている。次に警察を中心とした武道（柔道、空手）の普及、そして学校での体育科教育である。

王政復古時代にあたる1980年代、第10代君主、ビレンドラ・ビール・ビクラム・シャハ（以下、ビレンドラ国王とする）の頃になると、教育省は学校体育をはじめ、学校をエントリーポイントとしたスポーツの開発にも力を入れるようになる。カリキュラムの見直し、教科書の作成、体育教師の再トレーニングなど、政府主導のもと様々な取り組みがなされる（田中研一、1989）（金田英子、1991, pp. 21-30）。中でも、当時の国王の名をとったビレンドラ国王競技会（以下、ビレンドラ・シールドとする^{注1)}）と呼ばれるスポーツ競技会の開催は、今日のネパールにおけるスポーツの開発に大きな影響を与えるものとなった。

ところで、ネパールに青年海外協力隊（通称JOCV：Japan Overseas Cooperation Volunteer, 現：JICA 海外協力隊）が派遣され、本格的な国際協力事業が開始されたのは1970年9月である。以来50年間で1,400名を越えるJICA 海外協力隊員（青年海外協力隊；JOCV とシニア海外ボランティア；SV）が多岐にわたる分野で派遣され続けている。体育・スポーツに関しても1970年12月、スポーツ評議会にバドミントン隊員が、警察に柔道隊員が派遣されている^{注2)}。

このようにネパールにおけるスポーツの開発は初期の頃から日本との繋がりが深く、JOCVの活動をとおり草の根レベルでの支援が行われてきている。したがって、本研究で取り上げるJOCVの活動は今日におけるスポーツの開発課題を再確認する意味でも非常に有効であると言える。そこで本稿では、1980年代頃に全盛期を迎え実施されていた「ビレンドラ・シールド」に着目し、当時のスポーツの開発について、その概要を整理・分析しながら、国際協力現場におけるスポーツの開発の在り方について考察する。具体的には、ネパールについて概括した後、1980年代頃に実施されていた、「ビレンドラ・シールド」に焦点をあて、そのスポーツ競技会の概要を明らかにする。その際、JOCVの活動にも着目する。次に、それらの資料をもとに、国際協力現場におけるスポーツの開発^{注3)}について考察する。

2. 国のあらまし

人口と年齢構造

人口は30,424,878（2021年7月～）で、人口の大部分は、タライ地方の最南端の平原と中央の丘陵地帯の集中の間でほぼ均等に分散している。全体的な密度は非常に低い。年齢構造は以下のようになっている。0-14年：28.36%（男性4,526,786/女性4,073,642）、15-24年：20.93%（男性3,276,431/女性3,070,843）、25-54年：38.38%（男性5,251,553/女性6,387,365）、55-64年：6.64%（男性954,836/女性1,059,360）、65歳以上：5.69%（男性852,969/女性874,092）（2020 est.）。若い世代が非常に多く、首都や地方に関わらず街に出ると子どもが溢れている（The world Factbook, online）。

気候

ネパールの気候は年間を通じて温暖で過ごしやすい。しかしこの後述べるが、地理的に条件が異なり気候も地域によってかなり差異がある。季節は乾季と雨季に分けられる。6月から9月前半まで雨季で、9月後半から5月までが乾季となる。雨季はバケツをひっくり返したような雨が降ったと思えば、太陽が顔を出しカラッと晴れたりするにわか雨のようなものが多い。乾季は川の水が干上がり、乾燥した日々が続くが湿気がないため過ごしやすい。首都や人口が集中した広い地域では雪が降ることはめったにないが、当然高地の山間部は雪に覆われている。一方インド国境付近のタライ地方においては、朝晩は10度以下に冷えるが、日中40度を超えることもある（Deepak Thapa, 2019, p. 2）。

地理

ネパールは南アジアに位置し、北を中国チベット、東西南をインドという二大大国に挟まれた小国である。面積は北海道の1.8倍程で、南北に200 km、東西1000 km程の横長の国土であるが、北部のヒマラヤ山脈から南部のタライ平野までその高低差は8000 mを超える。東京-浜松間212 kmが8000 mの急坂であると仮定すると、そこに地域のフットサルコートから各種スポーツの競技場を造ることがいかに大変か想像に難しくない。国土を大きく分けると、以下の3区分に分けられる。すなわち、北部の世界最高峰エベレストの他、8000 m級8座を擁するヒマラヤ山脈地帯、多文化多民族が行き交う首都カトマンドゥーや第二の都市ポカラを含む中間山岳地帯、そして象やサイなどの多彩な動植物の育つ広大な平原が広がるタライ平野地帯である。これら全く条件の異なる地形が、一国に集約された非常に珍しい国である。当然のことながら、そこには多様な文化・民族、言語が存在していて、一概

にこれがネパールであると言い切れるものはない。

宗教

人口2970万人のネパールにおいて、81.3%がヒンドゥー教徒、9%が仏教徒、4.4%がイスラム教徒である。2007年頃までは世界で唯一ヒンドゥー教が国教として定められていた。現在もその名残からヒンドゥー教の催事が国の祝祭日に定められていたり、食事や概念など国民の生活に密接した文化的慣習が多い。なおヒンドゥー教は多神教であり、その中には仏陀も含まれているので、9%の仏教徒は、仏陀を神と定める一神教の仏教を指す。その一つにチベット仏教がある。チベットの国境付近はこのチベット仏教が盛んであり、国北部のヒマラヤ地帯の暮らしや文化に深く根付いている。このように民族・地域などによって異なる宗教や文化を一望に見ることもできるのも、この国の興味深いところである（地球の歩き方編集室, 2018, p.346）。

民族と言語

複雑な地理条件や自然環境は、多様な民族・文化に影響している。国という一つの社会形成の中での多面性は、学校という小さい組織も同様である。一つの学校には多様な民族の子どもが就学し、教員も異なる民族出身者が協働している。

ネパールの民族を語る上で外せないのがカースト制度についてである。王国がこの国を統一する以前は、それぞれの地域に住む民族がそれぞれの慣習に従って暮らしていた。14世紀、ステイティ・マッラ王の時代に法制化され、64種姓に分け、職業、生活をカースト制度に従わせる慣習を定着させた（長岡智寿子, 2018, p.54）。多様な民族は高カーストから低カーストとヒエラルキーを与えられ、社会的格差が生まれるようになった。特にインド国境付近に多いダリッドとよばれる人々は不可触民族とされカースト制度からも外され、差別を受けてきた。国内での反対運動や国際社会からの批判を受け現在カースト差別は法律上禁止されているが、長く続いたそれらの生活習慣や考え方は現代も根強く残っている。

住民は大別して①-a山地低部をおもな居住地とするネパールのヒンドゥー教（全人口の約50%）、①-b南部のタライに住む北インド系住民（約25%）および土着民タルー（約4%）、②-a山地中高部に住むチベット・ビルマ系の諸語を母語とする諸民族（約20%）、②-bチベット系住民（1%以下）、その他に分けられる。言語的には①の人々の母語はインド・ヨーロッパ語系で、①-aの人々はネパール語、①-bの人々はマイティリー、ボジュプリー、アワディーなどのヒンドゥー語の方言を話す。一方、②に属する人々の母語はチ

ベット・ビルマ語系で、その中に数十の民族の言語が含まれる。代表的民族（言語名も同様）は、②-aでは東からリンブー、ライ、タマン、ネワール、グルン、マガルなど、②-bではチベット、シェルパなどである。

民族人口は、マガル162万、タマン128万、ネワール125万など（それぞれ全人口の5.5～7%）の例もあるが、大半は数十万人以下である。なおTB系の人々の民族人口は、母語人口より多い傾向がある。一方、ネパール語が母語と答えた人口は、①-aの人口よりはるかに多い。すなわち母語をネパール語とする人々が他の民族のなかにもかなり存在するのである（石川順一, 2012, p.922）。

国王制度の歴史と変遷

18世紀中葉、プリトウビ・ナラヤン・シャハ王率いるゴルカ勢力がカトマンズ盆地を征服する。ゴルカ王朝は更に勢力を拡大し、現インド領のクマオン、ガルワールや東のシッキムに及んだ（著：中下直人「世界大百科事典」79頁）。19世紀初頭にイギリスとの戦争（ゴルカ戦争）に敗れ、国境線がほぼ現在の位置に確定された。その後約100年間は国王にかわって宰相ラナ一族によるラナ専制体制がひかれる。1951年ラナ専制崩壊とともに王政復古、トリブバン王により「開国」して近代化がすすめられる（森本泉, 2020, p.24）。ネパールの王政は、1951年、第8代トリブバン・ビール・ビクラム・シャハが亡命先のインドより帰国し王位に就くことで復古する。この頃から多様な民族委からなる国民一般に対する学校教育が本格的に始まる（杉本良男, 2018, p.155）。1955年トリブバン王死後、子であるマヘンドラ王は政党政治を廃止させるパンチャーヤト制度をすすめる。1972年ビレンドラ王は父王マヘンドラの死去後王権を継承したが、89-90年の民主化運動によりパンチャーヤト制度は廃止され、政党政治が復活した（石井遵, 2012, p.924）。

3. ビレンドラ・シールド

ビレンドラ・シールドに関する現存する資（史）料は、ほとんど報告されていない。そこで本稿では、ビレンドラ・シールド競技会の大会運営については、当時の限られた資料と、実際に大会運営に携わったネパール人スタッフ2名の記述式インタビューに基づいて整理した（令和2年8月実施）。具体的には、競技会のはじまりと経緯を踏まえた歴史的背景、競技会の組織体制と運営方法などの半構造化インタビュー項目を設定し、ネパール語にて回答を得たものを翻訳した。また、エピソードについては、JOCVネパール隊員から構成されるメーリングリストをとおし、自由記述にて情報収集を行った。その結果、5名からの情報を取

集することができた（令和2年9月実施）。

1) はじまりと大会開催の趣旨

ビレンドラ国王時代、学校体育は、すべての子どもたちが健康・安全な生活をするうえで重要であることに一定の理解を得られていた。そのような中、ネパールの学校体育の普及は、1971年に始まった「国家教育体制（5カ年）計画」の中でも重視されるようになった。もっとも、それ以前にも教科としての体育はカリキュラム上存在していた。しかし実際に体育・スポーツを教えることのできる教師が少なく、単に座学で理論的な知識のみを学ぶものであり、日々の生活に直接反映されるものではなかった。この国策と現場との乖離を少しでもなくす対策が求められたが、体育教員の再教育には、時間と費用がかかった。そこで、まずは少しでも多くの子どもたちに体育・スポーツの機会を与え身近なものとなるよう、また教員も体育・スポーツに関する知識を得ることができるよう、ネパール教育省によってビレンドラ・シールド競技会が企てられた。

スポーツは定められたルールに基づき目標の達成を目指すものであり、またその際に使用する用具は手入れをしながら大切に扱われなければならない。これらを生徒たちが継続的に学び実践することで、将来的に国際的な大会で活躍できる選手を育成する。また、毎年このような大会を実現させるためには経験のある、スキルを持った監督やコーチといった指導者がいなければならない。このように学校レベルでの競技会の開催は、運営する側にとっても、参加する側にとっても、ネパールにおけるスポーツの開発の原点にもなった。

2) 開催日の由来

王は国の象徴であり、統治する王の存在を確固たるものにする目的もあり、「ビレンドラ・シールド」という名がついた。したがって全国大会も、ビレンドラ国王の戴冠式が挙行されたビグラム暦2031年ファグン月（西暦1975年2月）に開催することとなった^{注4)}。これは、1971年に始まった「国家教育体制（5カ年）計画」の中で、「国王賞」を冠した競技大会を開催して国民のスポーツを振興しようと考案されたことに始まる。大会は学校の生徒が対象となった。男子も女子も参加権利があり、大会で優勝することを目標に多くの生徒が参加することで成功させてきた。ビレンドラ国王死去まで継続された。国王制が廃止された現在は、現大統領であるビッディア・バンドリの名でスポーツ大会が各地で開催されているというのが真相は不明である。

3) 競技運営の方法

各学校は大会で良い成績をおさめることで学校の知名度を上げることができた。

大会競技種目は、陸上競技とバレーボールで、陸上競技種目の詳細は、表1のとおりである。しかし、すべての競技種目が開催できるわけではなく、ある程度参加人数が集まったものみの開催となった。

この大会を運営していくために、教育省から派遣される監督・コーチは学校と協議のうえで、綿密に準備された。例えば生徒の試験に影響がないように学校教育修了試験^{注5)}を避けるなどの調整が行われる。それぞれの地域で実施した大会の記録は、地区教育事務所に集約される。こうして当時全75郡のデータは統計的に管理されながら、ビレンドラ・シールドは運営され

表1 ビレンドラ・シールド 陸上競技の種目

男子	女子
100m	100m
200m	200m
400m	400m
800m	800m
1500m	1500m
4 x 100m リレー	4 x 100m リレー
4 x 400m リレー	4 x 400m リレー
砲丸投げ（12ポンド）	砲丸投げ（8ポンド）
やり投げ	やり投げ
走り幅跳び	走り幅跳び
走り高跳び	走り高跳び
三段跳び	

※後に、男女5000m、男女10000m、女子三段跳びを追加

ていた。しかし、実際には75郡で開催するのは困難であった。各地域での予選大会で優秀な成績を取めたものは、その後ネパール国内の全国大会へと進み、そこで国を代表する選手を決める。この大会を経て、国際大会に出場するナショナル選手を選定していた。これら大会運営にかかる費用は、全て教育省が負担していた^{注6)}。

各種目、1位3ポイント、2位2ポイント、3位1ポイントを付与し、合計点で優勝校を決定した。

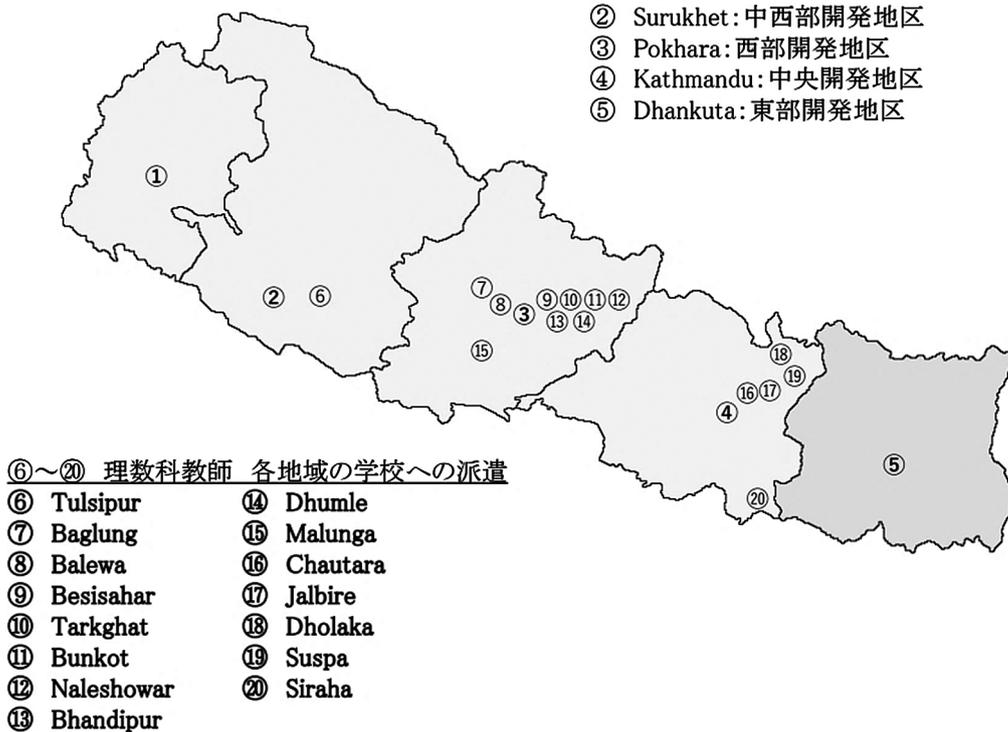
4) JOCV による国際支援

1980年代、ネパール国内の区画は5開発地区（東部、中央、西部、中西部、極西部）14県75郡で構成されていた^{注7)}。ネパール政府は各地区に教育省の配下となる地区教育事務所を配置し、4名の現地スタッフが体育・スポーツ（含、伝統舞踊）セッションに配属されていた。そして、それらを、教育省・カリキュラム開発センターが統括していた。JICAは1985年、カリキュラム教科書開発センターにJOCVシニア隊員を、5地区の教育事務所にJOCV体育隊員を派遣して隊員との連携活動を図った^{注8)}。すなわち、学校への派遣ではなく開発地域の教育委員会への派遣となった。また、当時は、JOCVの理数科教師の同時多数派遣が、地方の学校ベースに行われていた（図1）。その際、連絡が途

絶えたとき、歩いて生存が確認できる距離に配置するといった配慮もあった。したがって地区教育事務所から、郡大会の運営指導ならびに協力に、スタッフとともにJOCV体育隊員が現地に赴くと、現地の学校に配属されていたJOCV理数科教師隊員が、生徒の引率として居合わせることも、たびたびあった。図2は上述した1980年代頃のJOCV派遣体制を示したものである。このようにビレンドラ・シールドはネパールにおけるスポーツ競技会ではあったが、教育省という政府レベルから、学校という草の根レベルにいたるまで日本人ボランティアが関わっていたのがわかる。そして、日本人ボランティアのトップには、ネパールを熟知し、言葉にも不自由のない体育・スポーツを専門としたシニア隊員が、その配下には、教育省と現場とを繋げる5名の体育・スポーツを専門とした隊員が、そして学校といった草の根レベルでは、日本の学校やスポーツ教室などでのスポーツの経験をもち、かつ日本の教育現場を熟知している理数科教員が同時に活動することによって競技会の継続を可能とした。このようにスポーツの開発は、単にスポーツの専門家のみで実施するのではなく、日本においてスポーツを経験してきた人たちのサイドワーク的な協力を得ることが重要である。この大会を運営するために、郡大会や地区大会から全国大会まで、多くのJICA関係者による人的・

①～⑤ 体育隊員 5州開発地区への派遣

- ① Dipayal: 極西部開発地区
- ② Surukhet: 中西部開発地区
- ③ Pokhara: 西部開発地区
- ④ Kathmandu: 中央開発地区
- ⑤ Dhankuta: 東部開発地区



⑥～②① 理数科教師 各地域の学校への派遣

- | | |
|--------------|------------|
| ⑥ Tulsipur | ⑭ Dhumle |
| ⑦ Baglung | ⑮ Malunga |
| ⑧ Balewa | ⑯ Chautara |
| ⑨ Besisahar | ⑰ Jalbire |
| ⑩ Tarkghat | ⑱ Dholaka |
| ⑪ Bunkot | ⑲ Suspa |
| ⑫ Naleshowar | ⑳ Siraha |
| ⑬ Bhandipur | |

図1 1980年代頃の体育隊員および理数科教師隊員の任地

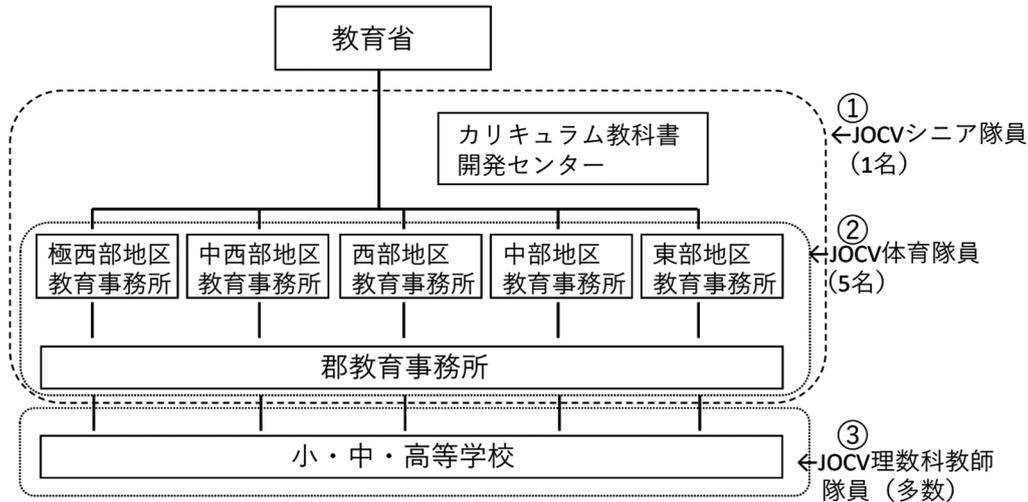


図2 1980年代頃のJOCV派遣体制

経済的な支援があった。大会の運営方法や計画策定などにおいては、とくに大きな貢献があった。

4. エピソードに見るスポーツの開発の諸相

1980年代頃に現地で活動していた元JOCVの隊員から、当時の情報を自由記述式インタビューによって収集した。エピソードの属性については、表2-1のとおりである。なお、エピソード中の下線部は、とくに注目すべき点として挙げ、各エピソードの末尾に注釈を追記した。

【エピソード1】

女子にバレーボールを指導するのが主な仕事だった。中西部開発地区（ネパールガンジからバルデアやスリケット、ダン等）を巡回し、ビレンドラ・シールドを実施した。

（その1）隣村のバルデアへ着任直後に出張した。記憶では陸上競技のリレーで、民族同士が衝突し、けんか沙汰になった後、私が審判をして収まった [1]。

（その2）男子のバレーボール全国大会（於、カトマンズ）に到着するのが遅くて、最終日に連続で試合をしてほろ負けしたこと [2]。（その時、自分は肝炎でカトマンズで静養中）

（その3）中西部に位置するネパールガンジで、極西部の男子チームの合宿を初めて実施。しかし雨期の最中でほとんど練習ができなかった上に、選手が農作業のために途中で帰省した [3]。

（その4）2年目にカトマンズの全国大会で、予選で負けたボカラの西部チームに決勝トーナメントで勝ち優勝した。

（その5）女子に初めてバレーボールを指導し始め

た頃は、サーブが相手チームに入れば得点になっていたのが、2年の指導後ラリーが続きネパールガンジで女子の大会が開けるようになった。

（その6）女子にバレーボールを指導するとき5月には気温が47度にもなるので、朝の6時（ツアバジェ）に集まるように言った [4] が、生徒が誰もいなくて、後で生徒に聞くと「チャールバジェ」と思って4時に来て帰ったとのこと。

[1] 外国人が介入し、審判をすることでもめ事を抑えることができた。

[2] 当時の主な移動交通手段はバスであった。土砂崩れなので道路が閉鎖されると開通するまでに何時間も待たされることが日常で、地方から上京するのに約15時間のところ、28時間を要したりしていた。

[3] 農作業のため、全員参加というのは、困難である。

[4] タライ地方では、朝6時には授業を開始し9時頃には終了する。

【エピソード2】

ネパールの中・高校生の大会（当時ネパールの高校は9・10年生）。そのため選手は9・10年生が中心となる。

僕の中の記憶にあるのは、バレーボールと陸上競技、それに入場行進。

特にバレーボールはチーム競技なので盛り上がる。また、生徒たちも、好んで練習する。協力隊という背景があり、当時理数科教師として派遣されていた教師は日本のMIKASAのバレーボールを支援経費で買うのが通常であった [5]。子ども達はサッカーも好きであったので、サッカーボールも支援経

ネパールにおけるスポーツの開発と国際協力：ビレンドラ国王競技会に焦点をあてて

表 2-1 エピソードの属性

エピソード番号	隊次	職種	任地	備考
1	昭和 53 年 3 次隊	体育	中西部開発地区 (ネパールガンジ)	
2	昭和 59 年 3 次隊	理数科教師	バグルン	休職参加
3	昭和 58 年 3 次隊	理数科教師	スルケット	休職参加
4	昭和 58 年 1 次隊	理数科教師	バンティプール	休職参加
5	昭和 62 年 1 次隊	体育	西部開発地区 (ボカラ)	「隊員報告書」 より抜粋
6	昭和 61-63 年度	体育	5 開発地区	

※当時の JOCV の派遣年齢は 20 歳以上 40 歳未満で、派遣は年 3 回。

表 2-2 スポーツ開発での課題

番号	レベル	キーワード	項目	補足	エピソード※
1	全国	ルール	100mのスタート地点を第3コーナーと第4コーナーの中間から始め、本来のゴール50m手間を当日のゴールにする	国を代表する陸上競技連盟の正式な役員ですら、目的次第でルールを変更しようとする。	6[15]
2	全国	インフラ	男子のバレーボール全国大会(於、カトマンズ)に到着するのが遅くて、最終日に連続で試合をしてぼろ負けしたこと	当時の主な移動交通手段はバスであった。土砂崩れなので道路が閉鎖されると開通するまでに何時間も待たされることが日常で、地方から上京するのに約15時間のところ、28時間を要したりしていた。	1[2]
3	郡	民族	記憶では陸上競技のリレーで、民族同士が衝突し、けんか沙汰になった後、私が審判をして収まった	外国人が介入し、審判をすることでめ事を抑えることができた。	1[1]
4	郡	施設	広場の雑草を刈り、200mトラックが描かれていた。地面は平らでなく、北側の山からの続きで少し南側に傾斜していた。夏の盛りであるから暑い昼を避けて、朝と夕方に競技が行なわれていた。選手の多くは裸足で競技をしていた。フィールド競技用の砂場は、乾燥した気候の堅い地面に水をまいて掘りかえしてやわらかくしたものである。走り高跳びのバーはなく、支柱に釘を打ちつけ両端に重りをつけた紐を代用していた	まずは、競技ができる環境の整備が必要不可欠であった。	3[7]
5	郡	ルール	ここでは公平に競技をするためにルールがあるのではなく、常に喧嘩の手段としてルールが利用されるのである	競技中、けんかになり試合が中断されることが、頻回にあった。	5[11]
6	郡	ルール	勝利至上主義がここでも見られる	勝つことに執拗にこだわる。	6[12]
7	郡	ルール	ルールは自己を正当化し、勝つための手段でもあった	ルールが、言い訳の材料となっている。	6[13]
8	郡	その他	いったいどこに住んでいるのだろうかと思われたぐらいの観客の多さであった	ビレンドラ・シールドは、地域の祭りの要素も持っていた。	3[8]
9	郡	審判	一度見学に行き陸上競技の着順を確認する係の手伝いをした	マンパワーを確保するのが難しい。	4[9]
10	学校	気候	雨期の最中でほとんど練習ができなかった上に、選手が農作業のために途中で帰省した	農作業のため、全員参加というのは、困難である。	1[3]
11	学校	気候	5月には気温が47度にもなるので、朝の6時(ツアバジェ)に集まるように言った	タライ地方では、朝6時には授業を開始し9時頃には終了する。	1[4]
12	学校	その他	当時理数科教師として派遣されていた教師は日本のMIKASAのバレーボールを支援経費で買うのが通常であった	インド製のバレーボールもあったが重たく素材も悪いので、日本製が人気だった。	2[5]
13	学校	民族	ネパールではカーストがあり、とりわけ、サルキ(皮職人)、ダマイ(楽器)、スナール(金の加工職人)など、職人の低階級やダディド(不可触賤民)があり、その他の上のカーストの者たちと一緒に部屋で食事をすることは許されない	競技の場では、特定の民族をからかうことはあったが、差別まではなかった。しかし、競技を離れた生活の場ではカーストへのスティグマが見られた。	2[6]
14	学校	インフラ	学校の運動場もバレーボールのコートを作ると、すぐに斜面、崖になってしまうようなところだった。サッカーをする場所はなかった	狭い場所で、多数がプレイできるバレーボールが選ばれた成果が、ここに伺える。	4[10]
15	学校	その他	女子は学校へ行くよりも家庭のことを、そして早く嫁に行き、家の者のために働く。そのような風習が、まだまだ残っていたため、親がスポーツに参加することを敬遠していた	女子は、スポーツよりも家の仕事を。早く、結婚するという風習が根強い。	6[14]

(※前項のエピソード内容の番号と一致)

費で購入した。

通常、ネパールには体育の教師がいないので、教科の教師が、持ち回りで体育を担当し、僕も体育を教えることもあった。また、放課後は、選手候補になる生徒たちが、ボールを借りに来て練習すると言うので、男子にはサッカーボールでバレーの練習をさせた。最初は痛がっていたが、数日でなれ普通に出来るようになってきた。そんな練習の成果があった、バレーボールは格段に上達した。

また、入場行進もポイントが入るときいたので、大会の前日に練習をした。この際、僕が教えたのは日本式の行進であった。つまり、膝を曲げ水平に腿を持ち上げ左右の手を振り行進。行進の最後は1, 2, 3で揃ってぴたりと停止する練習をし、これができるようになった。ネパールではこのように、ぴたりと止める行進の練習はあまり行われないので、絶対に1位になれると信じていた。

そんなこんなで、我が校の選手たちとともにバグルンのバザール（市場）へ出発。僕の高校は県庁所在地のバグルンから、徒歩1時間半あり、前日はバグルンバザールのホテル（民宿のような所）に宿泊。しかし、ここで一悶着。ホテルで、生徒達全員が食事をとることになると、ホテルの女主人が一部の生徒に対し、外で食べろと言ひ、先生たちはそれに従い、その一部の生徒たちを外へ誘導した。ネパールではカーストがあり、とりわけ、サルキ（皮職人）、ダマイ（楽器）、スナール（金の加工職人）など、職人の低階級やダディド（不可触賤民）があり、その他の上のカーストの者たちと一緒に部屋で食事をすることは許されない [6]。学校の体育教育だと言うのに、このようなことがあるとは本当に許しがたかった思い出であるが、先生たちも、生徒たちも、当然と言うか、仕方ない、と言うか、何も疑問を感じないようであった。僕は怒り心頭に達し、怒りまくったが、少なくとも当時（1986）のネパールではどうにもできないことであった。生徒同士は学校でも、宿舎でも、普通に仲良くしているが、そこに大人が介入したときには、カースト問題があからさまになる。つまり、大人がそれを許さない。なんとか、寝泊まりだけは同宿にするように交渉して、僕もそこで矛を収めた。

さて、いざ当日、入場行進も教えた通り、生徒たちがぴたりと行進を止めた。

バレーボールも決勝まで勝ち上がり、準優勝。

そのほか、やり投げ、高飛び、短距離走、中距離走とあったが、残念ながら、目立った成績はあげられなかった。

大会がすべて終わり、行進は？と訊くと、なんと、



写真1 バグルン郡ビレンドラ・シールドの開会式入場行進（金田氏 提供）

結果は最下位。なぜ？教師が言うには、ネパールの行進は手足を伸ばしたまま行進する、とのことで、足を曲げて行進するのは、その時点でアウト。先に言ってよ。と言う感じだった（写真1）。

[5] インド製のバレーボールもあったが重たく素材も悪いので、日本製が人気だった。

[6] 競技の場では、特定の民族をからかうことはあったが、差別まではなかった。しかし、競技を離れた生活の場ではカーストへのスティグマが見られた。

【エピソード3】

私がスケッチに赴任して間もない5月に、ビレンドラナガールの街のはずれの広場で郡の高校総合体育大会とでも言うべきビレンドラ・シールドが行なわれた。広場の雑草を刈り、200mトラックが描かれていた。地面は平らでなく、北側の山からの続きで少し南側に傾斜していた。夏の盛りであるから暑い昼を避けて、朝と夕方に競技が行なわれていた。選手の多くは裸足で競技をしていた。フィールド競技用の砂場は、乾燥した気候の堅い地面に水をまいて掘りかえしてやわらかくしたものである。走り高跳びのバーはなく、支柱に釘を打ちつけ両端に重りをつけた紐を代用していた [7]。日本のスポーツ大会を見慣れた私の目にはそれらの光景が奇異に映るとともに、厳しい状況で競技するネパール人のたくましさや物がないうちでの工夫された運営に感心させられた。だが、それにも増して驚いたのはいったいどこに住んでいるのだろうと思われたぐらいの観客の多さであった [8]。

見ている者が多いのは関心が高いことの現われだと思った。ビレンドラ・シールドのような郡の大会になれば出場できるのは選ばれた一部の選手だけな

ので、もっと多くの生徒が参加でき、観衆と一体となったものではないだろうかと思った。幸い私の学校には大きな運動場と呼ぶべき広場がある。ビレンドラ・シールドを見たことが校内運動会の出発点になった。

[7] まずは、競技ができる環境の整備が必要不可欠であった。

[8] ビレンドラ・シールドは、地域の祭りの要素も持っていた。

【エピソード4】

確かに「ビレンドラ・シールド」というのは懐かしいことばである。

ガンダキ県タナフン郡バンディプールにあったバヌー高校で数学を教えていたが、この学校でもビレンドラ・シールドのことはよく話題になっていた。毎年行われていた（毎年参加していた）のかどうかは記憶にないが、一度見学に行き陸上競技の着順を確認する係の手伝いをした [9]。

1984年（昭和59年）か1985年の頃、郡庁のあるダマウリで開催された。バレーボールやサッカーもあったはずだが、観た記憶がない。

陸上競技は短距離走や長距離、幅跳びや三段跳びもあった。三段跳びなど日本でもテレビで観るくらいだったので驚いた記憶がある。

バンディプールは尾根の上にある小さな集落なので、学校の運動場もバレーボールのコートを作ると、すぐに斜面、崖になってしまうようなところだった。サッカーをする場所はなかった [10]。その分バレーボールは生徒たちだけでなく、若い人たちもよくプレーしていた。

生徒たちの中には女子も男子に交じってバレーボールをしていましたが、当時とすれば珍しい光景であったのではないかと思う（写真1）。

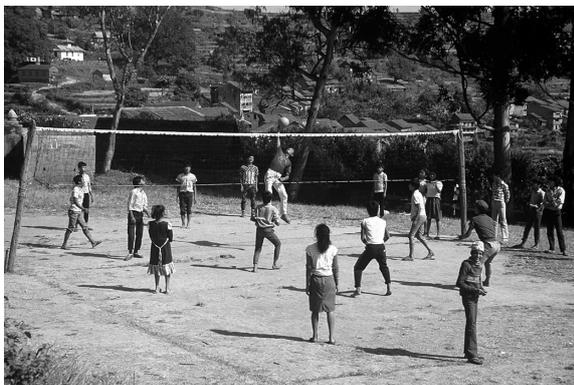


写真2 バンティプールでのバレーボール風景（談儀氏 提供）

[9] マンパワーを確保するのが難しい。

[10] 狭い場所で、多数がプレイできるバレーボールが選ばれた成果が、ここに伺える。

【エピソード5】

ビレンドラ・シールド競技大会とは、高校生を対象とした郡レベルの競技会のことである。現在ネパールは75郡あり、それぞれの郡で日程を調整し男女バレーボールと陸上競技を開催する。優秀な成績をおさめると地区競技会、さらには全国大会の代表選手としての参加資格が与えられるので、日本でいう高等学校総合体育大会の小型版と言えよう。だが実際には毎回金銭面で大きな問題を抱えることになり、75郡がすべて開催されるということはまずない。

会場は競技ができる敷地があり、なおかつ大会期間中、全選手を宿泊させるだけの設備が整っている所となる。しかし一つの郡はかなり広地域に及ぶので競技会場まで2日もかかる学校も出てくる。したがって参加する学校側はその費用が学校負担であるため、種目をできるかぎり兼ねさせ出場者を少なくしようとする。いっぽう、大会主催者側も費用の不足から、1日でも半日でも早く大会を終了させようと日の出から日の入りまでぎっしりとスケジュールを組むのである。言うまでもなく最後の方になると生徒は疲れ果ててしまう。

ところでこの競技会には、常に「けんか」がつきものである。個人入賞者には賞品と賞状が、また優勝校には政府から賞金が送られるので教師も生徒たちも目の色が変わる。そこで毎回見受けられるのがバレーボールでの喧嘩だ。タッチネット、アウト・イン、ローテーションファウル等々そんなもめごとが後を絶たない。ここでは公平に競技をするためにルールがあるのではなく、常に喧嘩の手段としてルールが利用されるのである [11]。中でも印象深いのはバグルン郡での大会である。その時私は陸上競技のスターターをしていた。優勝を狙っている学校の生徒が4×100mリレーでフライングをした。注意を促したにもかかわらず、再度フライングをしたので失格とした。と、競技が中断された。失格にしたので生徒が腹を立てたのだ。これはルールだと言っても譲らない。そんなことは教わっていないから知らないと言い張るのだ。教師もそんなルールは知らないとしらをきる。知らないではすまされない。「このルールブックに書いてある。そしてこのルールブックは学校に絶対行き渡っているはずだ。」という、「ヨオーイ！と言い、一瞬‘ま’を置いたスターターが悪い、そんなことはルールブックには

書いていない」と言い出した。確かにそこまでルールブックには書かれていない。だが「ヨオーイと言った後、全員が静止しているかどうか、スタートラインに指やバトンが触れてないか見るためには一瞬、間ができてあたりまえだろう、審判規定にもそれは触れてある。」というのだが、なんとかして再度競技を行おうとするのである。そのうちに、あの日本人はルールを知らないだの、自分たちの学校を優勝させたくないからあんなことを言うのだと好きなことを言い出す。「バカバカしくてやってられないよ。」と思わず日本語で独り言を言うものの、そこで引き下がると自分の過ちを認めたと誤解されるのは百も承知である。30分、1時間と時がたっていく。試合放棄の意思表示をすれば、スタッフが慌ててどうにかなるだろうという計算で生徒たちは校旗をおろし帰ろうとしている。郡教育事務所は競技が予定どおりに終わらないと必要以上に経費がかかるのでなんとかして事をおさめようとするのだが騒ぎが大きくなる一方であった。そのうちに郡長、さらには県警察までが出てきた。そして私が呼び出された。「事情を説明しなさい。」というので、「生徒がフライングを2回したのでルールに基づき失格としました。」と起きたことだけを述べた。横から、「でも…」とそこの学校の教師が口をはさもうとした。と警察署長は、「言い訳は無用！早く競技を進めなさい。」とどなると、自ずから観客をコントロールし始めた。そうしてようやく競技は再開された。生徒たちは本当に試合を放棄すると優勝ということは有り得ないので慌てて戻ってきた。そして試合は再開されたのだった。試合終了後、警察署長がカウンターパートに、「あの日本人はさっきのことをどう言っていた？」と尋ねたそうだ。

彼は、「とても理解ある署長さんで本当に助かったって言ったらすごく喜んで、これからも何かあったら私のところにいらっしゃいと行ってたよ。」と言った。私は何も言っていないのになんて頭の切れるカウンターパートだと思わず笑ってしまった。だが体育人として体育・スポーツとは何かを改めて考えさせられる事件であった「隊員報告書」(金田英子1990)。

[11] 競技中、けんかになり試合が中断されることが、頻回にあった。

【エピソード6】

話題提供：5開発地区に派遣された体育隊員

(その1)

長距離になると、10人くらいの参加者が、最後は



写真3 バグルン郡ビレンドラ・シールド800m走でハンカチを加えて力走する生徒(金田氏提供)

3人しかいなくなる。3等までが賞品をもらえ、得点となるので、途中で棄権してしまう。そのぶん、大会時間を短縮することができるが勝利至上主義がここでも見られる [12]。

(その2)

ここでは、ルールは自己を正当化し、勝つための手段でもあった [13]。したがって、審判は外国人であるJOCVの隊員か、地区教育事務所から競技運営に携わっている現地スタッフが行うのが慣例だった。

(その3)

長距離走では、ハンカチを口にくわえて走る生徒がいた。口から魂が逃げるので、封じためだという(写真3)。

(その4)

女子は学校へ行くよりも家庭のことを、そして早く嫁に行き、家の者のために働く。そのような風習が、まだまだ残っていたため、親がスポーツに参加することを敬遠していた [14]。全国大学出場のため、学校長から親に説得を促してもらうが、同意せず。昼間は畑仕事で家にはいないため、わざわざ夕飯時に家に訪れ、親を説得し、女子生徒を全国大会(カトマンドゥー)に参加させた。

(その5)

郡大会のバレーボールで優勝したメンバーの中に、他の学校の生徒が混ざってプレイをしていたと不服申し立てを受ける。そこで地区教育事務所では、学校を訪問し、生徒の学籍確認を行う。インクからして、いかにも書いてつけ足された氏名のようなのであるが、校長は、「この生徒は、ほとんど学校に来ないが、スポーツのときになると出てくる。」と説明した。

(その6)

村での大会当日は、お祭りのような騒ぎとなる。どこからともなく、リヤカーにお菓子や子どもの玩

具を積んだ商人も登場する。ビレンドラ・シールドが、村をあげての一大スポーツイベントの場と成っている。バレーボールの競技中、自分が審判をしていたら、突然悲鳴が聞こえ、みなその場を逃げ出した。振り返ると、女性の耳がそぎ落とされ、耳から流血していた。その女性のイヤリング欲しさに犯行に及んだらしい。しばらく競技は中断されたが、そのまま続行された。日本では考えられない観戦スタイルが、そこにあった。

(その7)

トラックやバレーボールコートは、まず競技運営者が全員で作成する。隊員が支援経費で調達した限られたメジャーで計測し、長い紐で長さを固定する。その紐にそって、素手で小麦粉を石灰代わりにしてラインを引いていく。陸上競技では多数の種目が設定されていたが、実際には、ある程度人数が揃った種目のみ実施していた。

(その8)

バレーボールの支柱があったのは、カトマンドゥーとポカラだけだった。しかも、ポカラは鉄工所に行き、説明をして職人に作ってもらった。

(その9)

国王の誕生祝いの際、陸上競技の100mを披露することになった。ポカラの400mの陸上競技場で、メインスタンドには貴賓席もあり、厳重な警護のもと、国王と女王は、その貴賓席に招待される。ネパール陸上競技連盟の役員であるスタッフが、「国王には、ゴールの一番よい瞬間を披露しなければならないので、100mのスタート地点を第3コーナーと第4コーナーの中間から始め、本来のゴール50m手間を当日のゴールにする [15]」と言い張る。したがって、審判台も、その位置に合わせ用意をするということだった。100mの曲線走など聞いたことも見たこともない。猛反対し、結局、100mのゴールのときだけ、国王が護衛を従えゴール付近に移動し観覧するということで落ち着いた。

[12] 勝つことに執拗にこだわる。

[13] ルールが、言い訳の材料となっている。

[14] 女子は、スポーツよりも家の仕事を。早く、結婚するという風習が根強い。

[15] 国を代表する陸上競技連盟の正式な役員ですら、目的次第でルールを変更しようとする。

以上が、当時の競技会の実情であった。次に、これらのエピソードをもとに、国際協力現場におけるスポーツの開発について検討する。

5. ビレンドラ・シールドをとおして見える スポーツの開発の課題

前項のエピソードについて、その課題を抽出し整理した(表2-2)。

スポーツの開発の課題は、全国レベルおよび郡レベルでの競技会、そしてそれに参加するための日常となる学校現場レベルで異なっていることがわかる。そこで、ここでは、全国レベル、郡レベル、そして学校現場レベルに分けて検討する。

1) 全国大会レベル

競技そのものよりも、国王への敬意の方が尊重される傾向にあることが窺える。

全国大会レベルでは、選手たちは各開発地区の中心地にいったん集まり、そこからの移動となる。客を輸送する鉄道網がないネパールでの都市部への移動は、飛行機かバスが主な手段となるが、山岳地帯を通過する道路事情は決して万全ではなく競技に多大な影響を与えうることも考えられる。

2) 郡レベル

ここでは、競技会を運営する側と参加する側に分けて考察する。

まず、競技会を運営する側は陸上競技のためのグラウンド、そしてバレーボール競技のためのコートの設営が、すべて手作業となる。したがって、それにともなう用具・器具はもとより、そのための技術も習得している必要がある。また、最新の競技ルールを熟知しておくことは、口論を回避するために重要である。そのためにも、ボランティアという立場で大会運営に関与する第三者、すなわちJOCVのような人材の積極的配置は効果的であると言える。

次に参加する側であるが、競技会の前にルール確認の講習会の実施なども一案である。しかし交通手段がなく、何時間もかけ徒歩で遠方の村から会場を訪れる学校にとっては、予算の都合上、できるだけ滞在時間を短くし、宿泊することなく村に帰ることを望むので現実的ではない。

3) 学校レベル

競技会に参加するためには、練習が必要となるが、その時間の確保が難しい。それは経済的な理由からスポーツに興ずることができない場合と、気候や地形から、計画通りに練習ができないことによる。それでも、少しずつの積み重ねが、結果的に地域のスポーツ振興へとつながっていく。

また、女子教育に関しても、家事優先である傾向に

あることは否めない。そして民族やカーストの問題も根深いものがあり、慎重さを要する。そのような限られた地域社会の中に外国人が積極的に関与するということは、格差社会の解決にもつながる可能性を広げることになる。

6. まとめ

国家レベルでのスポーツの開発には、集団へのアプローチが必要不可欠である。社会における集団とは、行政・学校・地域コミュニティなどが挙げられる。

本稿では、レトロスペクティブ調査(後ろ向き研究)を応用して、ネパールにおけるスポーツの開発について考察してきた。国際協力において、教育の成果は教材開発のようにすぐさま目に見えるものと、生徒自身が保護者という立場の年代に達した頃でなければ評価できないものがある。同様に、このビレンドラ・シールドが果たした役割についても、すぐさま目に見えた結論を導き出せるものではない。

ビレンドラ・シールドは国王の名のもとに、教育省が主催するスポーツ競技会であった。その目的は、第1に国民に広くスポーツを普及し、かつ国王の存在を固持させるためであり、学校を対象としていた。第2に、若い世代の競技力向上が期待でき、将来的に国際大会で活躍できるアスリートの育成に繋げていく意図があった。第3に、学校は地域との繋がりが非常に強く、各学校で開催されるビレンドラ・シールドに家族や親せきなど地域の人が地元を挙げて応援する。それにより学校のみならずその地域全体がスポーツに熱狂し、地域におけるスポーツの開発につながる事が指摘できる。

ところで本稿では、ビレンドラ国王時代におけるスポーツの開発について、その概要を整理・分析してきたが、公正な競技会の運営に課題が見られるよう、学校では、“スポーツの価値の教育”も重要であることが示唆された。ビレンドラ国王時代のスポーツの開発は、見方によっては“スポーツの価値の教育”の部分を担っており、そのことがスポーツの開発を助長したとも捉えることができる。

今日のネパールは、山間部までインフラが及んだ結果道路が整備され、スマートフォンが普及している。携帯やスマートフォンをつなぐ無線通信の進歩で、スポーツに対する取りくみ方にも多様性がでてきている。競技ルールについても、最新の情報を簡単に入手することが可能となった。したがって、今に生きる“スポーツの価値の教育”を、いつ、どのように学校の中で取り入れて行くべきなのかは今日の課題と言っても過言ではない。

ビレンドラ・シールドそのものは、ネパールの民主

化により継続が困難となり消滅してしまった。限られた期間ではあったがネパール国内の各地で行われたことで、全国的なスポーツの開発が促進された。そして当時、この競技会に出場した生徒の多くは、後にネパールスポーツ評議会の一員となり、今日のスポーツ界をリードする存在となっている。

謝 辞

本稿の作成にあたり、終始適切な助言を賜り、また丁寧な指導して下さいましたスポーツ国際学科の金田英子先生、数々のご助言をいただきました、青年海外協力隊・ネパールOGの上坂とよ子氏、インタビューに協力して下さいました元JOCVの方々へ感謝いたします。

注

- 注1) 本稿のタイトルでは、「ビレンドラ国王競技会」としているが、ネパール国内では「ビレンドラ・シールド」という名で親しまれていた。したがって、本文中は「ビレンドラ・シールド」で統一する。
- 注2) 2020年9月21日にはオンラインで、ネパール協力隊50周年記念セミナーが開催された。派遣人数の典拠は、このときの紹介に基づく。
- 注3) 本稿では「スポーツの開発」という用語で統一する。国際協力の場でのスポーツに関わる用語の使い方については、独立行政法人 国際協力機構「JICA「スポーツと開発」事業取り組み方針」2018年4月、土屋智美・清水 諭・山口 拓「スポーツ国際開発学の現在：国際会議とプログラム開発研修レポート」筑波大学体育系紀要, 38 153-160, 2015を参考とした。
- 注4) ネパールでは、日常生活の中で、いくつかの暦が併用されているが、主に太陰暦のビグラム暦がオフィシャルに使用されている。海外との繋がりの深い組織・団体では、西暦も同時に使用されている。
- 注5) ネパールでは初等・中等教育が10年間とされている。そのため、日本の「高校卒業認定試験」と同じような扱いでSLCに合格することで高校卒業と見なされていて、これをSchool Leaving Certificate(通称SLC, 学校教育修了試験)と呼び、この制度は2016年まで続いた。
- 注6) 競技運営に関わる具体的な経費については、実際にどれだけの額が郡、あるいは地区レベルにまで支給されていたのか確たる資料が現存していないため不明である。
- 注7) 1980年までは、中西部はなく、極西部に包括されていたため4地区だった。
- 注8) 80年代は、隊員・ボランティアの派遣形態も多様であった。協力隊経験者がその経験・語学力を生かして活動する「シニア隊員」制度が活用され、シニア隊員をリーダーとして各種のミニプロジェクトが他国に先駆けて展開され、体育も、その一つだった。

文 献

石井 遵(2012)ネパール. 辛島 昇+前田専学+江島

- 恵教+応地利明+小西正捷+坂田貞二+重松伸司+清水学+成沢 光+山崎元一監修, 南アジアを知る事典, 株式会社平凡社:東京, p. 924.
- 石川順一 (2012) ネパール. [新版] 南アジアを知る事典, 平凡社:東京, p. 922.
- 岡田千あき編著 (2020) スポーツで蒔く平和の種, 紛争・難民・平和構築. 大阪大学出版会:大阪.
- 齊藤一彦, 岡田千あき, 鈴木直文編著 (2015) スポーツと国際協力, スポーツに秘められた豊かな可能性. 大修館書店:東京.
- スポーツを通じた国際協力事業の類型化 スポーツ産業学研究 26(2), 291-302, 2016-09 日本スポーツ産業学会.
- 金田英子「ビレンドラシールド競技大会」『隊員報告書 昭和62年1次隊』国際協力事業団青年海外協力隊, pp. 19-21, 1990年(非公開)
- 杉本良男 (2018) ネパールの国民・民族・言語. インド文化事典編集委員会, インド文化事典. 丸善出版株式会社:東京, p. 155.
- スポーツ庁 (online) スポーツSDGs, https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop08/list/1410259.htm, (参照日 2021年3月30日)
- 田中研一 (1989) ネパールの学校体育に関する情報集, 青年海外協力隊(非公開)
- 金田英子 (1991) 「ネパールにおける高等学校体育の成立と展開」日本体育大学紀要 21 巻 1号, p. 21-30.
- 地球の歩き方編集室 (2018) 宗教と信仰. 中田瑞穂 (シエスタ) 編, 地球の歩き方ネパールとヒマラヤトレッキング 2018~2019年版. 株式会社ダイヤモンド・ビッグ社:東京, p. 346.
- 長岡智寿子 (2018) カーストによる社会構造. ネパールの社会参加と識字教育 生活世界に基づいた学びの実践. 明石書店:東京, p. 54.
- 森本 泉 (2020) 地域的多様性と変容する社会. 日本ネパール協会編, 現代ネパールを知るための60章. 明石書店:東京, p. 24.
- Deepak Thapa (2019) Nepal Introduction. Pawan Shakya, NEPAL and It's Splendour. Himalayan MapHouse: Nepal, p. 2.
- Department of Economic and Social Affairs Sustainable Development (online) <https://sdgs.un.org/goals>, (参照日 2021年3月20日)
- factbook/countries/nepal/, (参照日 2021年3月28日).
- JAPAN SPORT COUNCIL (日本スポーツ振興センター) (online) 190704.pdf, jpn-sport.go.jp
- The world Factbook (online), South Asia Nepal, <https://www.cia.gov/the-world->
-
- <連絡先>
著者名: 加藤泰紀
住 所: 東京都世田谷区深沢 7-1-1
所 属: 日本体育大学スポーツ文化学部スポーツ国際学科
(現高岡市立南星中学校教諭)
E-mail アドレス: taiki1207pc@gmail.com